No.9	提　案　名：リソース・コネクティブ・プロムナード ～空間資源を活用したコミュニティの再編による白沢の継承方法～	
	提案団体名：宇都宮大学　遠藤研究室	
	所　　属：宇都宮大学	
	代　表　者：白石真柚	指導教員：遠藤康一
メンバー	白石真柚　安達数眞　三間智貴　永田大昂　濱﨑瀧大郎　藤原大輔　和久井亘	

○　提案の要旨

宇都宮市白沢町はかつて奥州街道の宿場町として栄え、町内の中央には白沢街道と呼ばれる道が存在する。町内では地域住民で構成された団体(「白沢宿の会」など)によって祭事などの運営が行われている。しかし近年では会のメンバーの高齢化や若者のコミュニティへの関与が希薄であることから、以前のような活気あふれる運営が困難な状況になっている。さらに、宿場町エリアに隣接する丘上の新興住宅地には若者から子育て世代が多く居住し、地形的に分断されていると同時に相互のコミュニティの関与が難しくなっている。また、白沢宿には宿場時代の本陣跡が残り、街中の水路や斜面、地域に根差した社寺・商店など豊富な空間資源がある。しかしそれらは個別性が強く、相互のつながりが希薄であることや住民同士の活動の関与が活発でない現状がある。そこで、本提案では白沢町の持つ豊富な空間資源と住民同士の活動の関係を再構築することで地域での共創のかたちが作られ、住民が主体となって継承する新しい白沢の姿を再構築する。

１．提案の背景・目的

現在我が国では、都市中心部への機能集中や、地域に根付いた生業の減少により、郊外には空地が際立つようになった。

白沢町においてもまちなかには大小さまざまな空地が散見され、そこは現在使われていないものの、まちの中央を通る白沢街道と脇の小道をつなぐ可能性のあるものや、神社や商店など周辺のスポットと関係づく可能性のあるものなど、空間の連携により活動の創出に働くなど多様なポテンシャルを秘めていると考えられる。私たちはそのような空地に対して、空地の性格とその周辺の空間資源に着目し、それらの分析をもとに住民同士の営みの関係を再構築することで、新たな白沢町の共創につながる方法を検討する。これは、地方郊外における、様々な空間資源と空地について再注目し、新しいまちの構造を位置付け、住民が参画できる場所とするものであり、地方郊外における空地の新たな利活用方法の提案となる。

２．提案の目標・課題「まちに広がる共創の輪　～新たな価値の創造を目指して～」との関連

白沢町には白沢街道を中心とした「白沢宿の会」をはじめ、複数の地域団体・コミュニティが存在しているものの、それらの結びつきは少ない。そこで白沢町にある空間資源と空地に注目し、複数あるコミュニティが空地を通して同時的に多様な活動をする場所を創出することで、活動による地域の空間密度の向上が期待できる。これは、その周辺住民の参画が可能なまちの核となるための方法を提案するものである。

３．現状分析

3.1　資料領域

栃木県宇都宮市白沢町における白沢街道沿いおよび新興住宅地周辺にて、地域の活動を能動的に生み出すことを目的に、建築的操作が可能な空地を資料範囲とした。

3.2　研究の概要

まず、資料範囲内の現地調査にて地域名のまとまった空地 48 を抽出した(図 1)。

地域コミュニティの分析

・資料調査や現地でのヒアリングなどをもとに白沢町内でのコミュニティの関係を分析し、住民

同士の関係を中心にまとめる。

空間分析

・空地の接道面数と大きさに注目し、空地の特徴をとらえる。
・空地の周辺にある神社や水路などの空間資源を分析することで、空地周辺の性格を明らかにする。
・空地の特徴と空地周辺の要素を重ね合わせ、空地の特徴（タイプ）を検討する。

ケーススタディ

・特徴的なエリアを選定しケーススタディを行う。

3.3　調査期間

2024 年 8 月から 11 月の期間に実地調査等による記録・確認を行った。

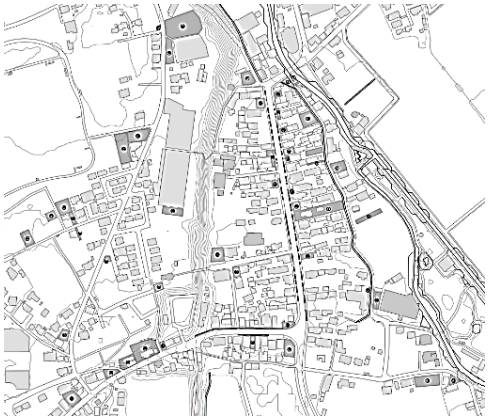


図 1　資料範囲 S=1:12000

4．白沢町におけるコミュニティ

本章では地域団体や個人のつながりなど、白沢町におけるコミュニティのつながりを分析し、図とマップにまとめることで、白沢町のコミュニティ同士の関係の実態を明らかにする。

4.1　白沢町の昔と今

かつての白沢町は奥州街道の宿場町として栄え、町内には本陣と脇本陣を中心にさまざまな生業と人々のつながりが存在した。現在も家々にさげられている屋号は江戸時代から続くものであり、かつての生業同士の連関も見ることができる(**図 2**)。

また、明治時代までは白沢街道の中央に水路が流れ、馬の水飲みや旅人が足を洗う場になっていたなど、水路という空間資源を通じた人の活動が存在した。しかし町割の整備とともに水路は道の両脇に分かれ、生活用水として使われることもなくなった。

さらに白沢町内には歴史的な神社や寺が複数あり、町内の七福神巡りなどは残っているものの祭事は年々減り続け、文化的な空間資源が低/未利用のまま町内に存在する。

これらのように白沢町にみられた生業や人同士のつながりと、それらを支える水路や社寺等の空間資源同士の関係は希薄なものとなり、白沢町での〈共創〉は徐々に薄れてきている。

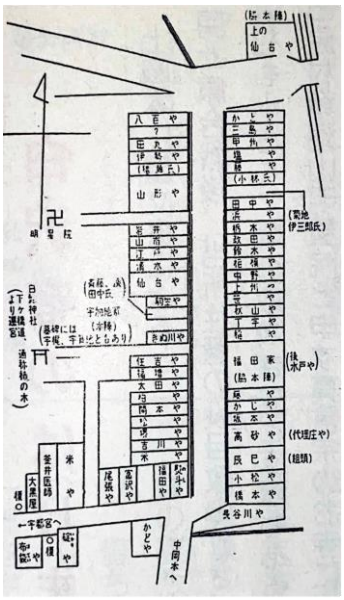


図 2　白沢街道沿いの屋号

4.2　ヒアリングによる白沢町のコミュニティの実態

現地でのヒアリング調査により、現在の白沢町におけるコミュニティの実態を明らかにした。

白沢街道沿いに本陣のあった「宇加地家」を中心に「白沢宿の会」や、白沢町に点在する神社の管理団体のつながりなど、各コミュニティ内での結束について確認することができた。しかし、白沢小学校は新興住宅地周辺であることから、白沢街道沿いとのコミュニティのつながりは希薄であり、白沢街道と新興住宅地を隔てる斜面林によって物理的にもつながりの強さが見られないことが分かった。

また、新興住宅地には地域活動が醸成されておらず白沢街道沿いの地域との関係を持ちづらい状況になっていることも分かった。さらに白沢町内では住民や町外の人と思われる方が歩いている様子をいくらか確認できたが、町内に滞留する場所が少ないことから滞在時間が短く、町内を通るだけの活動が多くみられた。白沢小学校の生徒についても、登下校で白沢街道を歩く人をいくらか確認できたが、大多数は新興住宅地からの登下校であった。

このことから、現在の白沢町では、相互に関わりを持つポテンシャルを秘めたコミュニティや団体が存在しているものの、それらの関わり合いはいまだ持てずにいることがヒアリングから分かった(**図 3**)。これは白沢街道沿いと新興住宅地間の物理的ギャップをはじめ、年代や地域団体間のギャップなどが起因していると考えた。

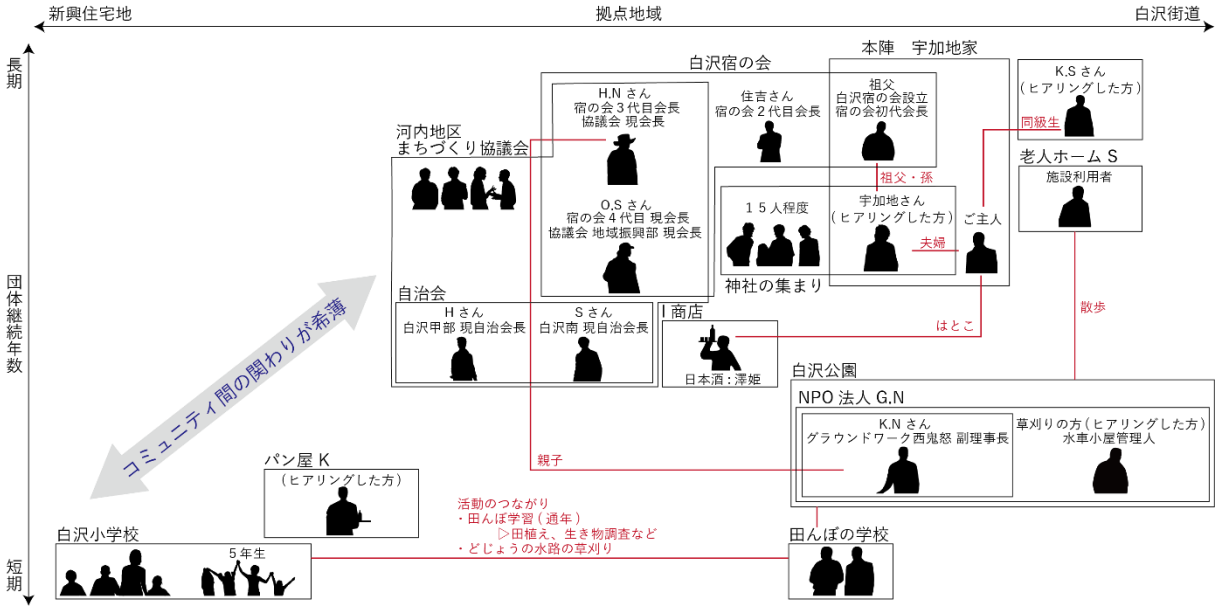


図 3 白沢町におけるコミュニティの関係図

4.3　白沢町におけるコミュニティと空間資源の分析

前項までのことから、白沢町では水路や歴史ある神社や寺、地域に根付いた商店などの空間資源が低/未利用になっている現状と、「白沢宿の会」や地域の小学生などの地域に存在するコミュニティ間の相互の関係が希薄になっているという現状が認められた。

そのため、本提案では空間資源を通してコミュニティ同士を関係づけるとともに白沢町内に新たな共創の仕組みを作り出す。

５．空地の空間構成パタン

本章では空地の接道面数と大きさを分類し、空地の空間構成を検討した。

5.1　空地の接道面数による分類

資料範囲内にみられた空地について、接続する道路の本数を分析し、接道面数「複数」、「単数」として整理した（**表 1**）。その結果、「複数」は 12 件、「単数」は 36 件みられた。

5.2　空地の大きさによる分類

資料範囲内にみられた空地について、空地の大きさを「大(500 ㎡以上)」、「中(100 ㎡以上 500 ㎡未満)」「小(100 ㎡未満)」の 3 つに分類した結果(**表 2**)、「大」は 7 件、「中」は 26 件、「小」は 14 件みられた。

5.3　接道面数と空地大きさの重ね合わせによる空地の特徴

前項までに整理した空地の接道面数と大きさの分類を組み合わせた結果(**表５**)、①～④の４つのパタンを得た。この４つのパタンのうち、①は接道面数が複数かつ大きさ大のもので、道を大きく拡張しつつまちの動線同士を関係づけており、複数の建築物や公園など、多様な用途としてのポテンシャルをもつ空地といえる。一方、④は接道面数が単数かつ大きさ中・小のもので、白沢町の道の脇に存在しポケットパークとなるような空地であるといえる。

表 1 接道面数

単数	複数	
	垂直 L	平行 =
(36)	(10)	(2)

表 2 敷地の大きさ

大 (7)	中 (26)	小 (14)
≧500 ㎡	500 ㎡> ≧100 ㎡	100 ㎡>

表 3 空地周囲の地形

傾斜 (4)	フラット (44)

表 4 隣接要素

住宅：住	(31)
工場：工	(3)
公共施設：公	(2)
畑・田んぼ：畑	(13)

表 5 空地の特徴

接道面数＼大きさ	大	中	小
複数 直交	33 ① (1)	2, 21, 26, 28, 38, 39 (6)	1, 25, 31, 37, 45 ② (5)
複数 平行	7, 8 (2)	(0)	(0)
単数	11, 30, 34, 36 ③ (4)	3, 4, 5, 6, 10, 12, 13, 16, 20, 22, 23, 27, 29, 32, 35, 40, 42, 43, 44, 46 (20)	9, 14, 15, 17, 18, 19, 24, 41, 47 ④ (9)

６．空地周辺の空間資源パタン

本章では、空地周辺の空間資源について、水資源や樹木などの「自然要素」と、建物要素の中で、神社や寺などの「文化要素」、地域に根付いた店舗などの「産業要素」の 3 つの要素を分析し、空地がどのような白沢の空間資源に囲まれているか、その性格を明らかにする。

6.1　周辺要素の分析

また、建物要素としては文化要素の中に本陣や社寺、産業要素としては酒店のＩ商店などがみられた(**表 6**)。

6.2　空地周辺の空間資源からみる特徴

前項の空間資源の要素数による分類により、空地周辺の空間資源について A～C のパタンを得た(**表 7**)。A は３つの空間資源の要素が空地周辺に存在しているものであり、空地周辺の空間資源が最も豊かなものである。また、水資源や寺を含む傾向を得られた。一方、C は 3 つの空間資源の要素をどれも空地周辺に存在しないものである。

表 6　周辺要素

自然要素	建物要素	
	文化	産業
樹木 (11) 水資源 (18)	本陣 (6)　明星院 (5) 薬師堂 (4)　白髭神社 (3) 須賀神社 (3)　地蔵堂 (3) 公園 (2)	Ｉ商店 (9) Ｋ店 (4)

※空地から 300m 以内

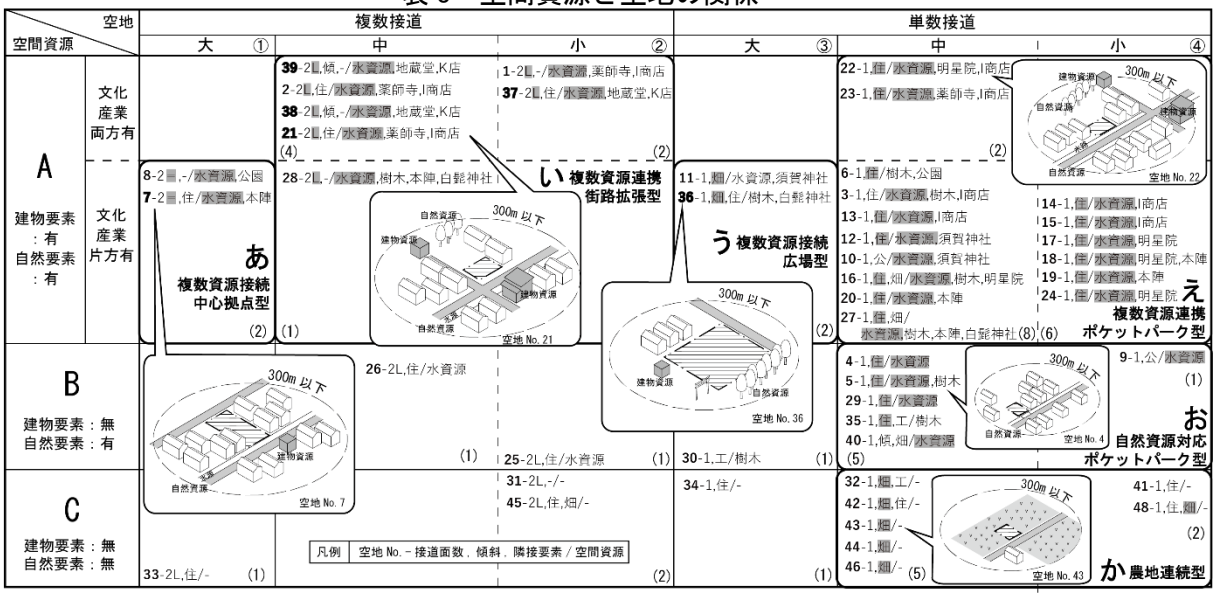
表 7　周辺要素組み合わせ

建物 / 自然	あり	なし
あり	A 300m 以下 道路 建物資源 自然資源 (27)	B 300m 以下 道路 自然資源 (9)
なし	(0)	C 300m 以下 (11)

７．空地の類型

前章までに整理した空地の空間構成パタンと空間資源パタンを組み合わせ、周辺環境に対して動線空間がどのように位置づいているかを整理した結果（**表 8**)、**あ～か**の類型を得た。まず、**あ**は比較的大きく、平行に二面接道し周囲に複数の空間資源が存在するものである。これは、通り抜けでき、多方へアクセスが容易であることから町における中心拠点的な役割を担い得る空地であるといえる。一方、単数接道で比較的小さい**か**は、周囲に空間資源が存在しないものであり、畑に隣接するものが多くみられた。これは隣接する農地と同規模な空間を持つ空地であり、周囲と連続性を持つあり方であるといえる。また、**い**は複数に接道し比較的小さく、周囲に空間資源が複数存在するものである。これは街路を拡張する開放的な空地が、周囲の空間資源を接続し得るあり方であるといえる。また、単数接道で比較的大きい**う**は滞留的で周囲に比べ開けた空間を持つもので、周囲の複数の空間資源を接続し得る広場的なあり方である。単数接道で比較的小さい空地である**え**,**お**は、周囲に水資源があるものが多くみられた。これは道路脇に水路が通り住宅が並ぶ街道沿いの連続した街並みのなかの、ポケットパーク的なあり方であるといえる。この内、**え**は周囲に複数の空間資源が存在するものであり、小規模な空地が周囲の空間資源と連携し得るあり方であるといえる。**お**は、自然資源のみ周囲に存在するものであり、自然資源を活用した空地の活動が想定し得るあり方であるといえる。

表 8　空間資源と空地の関係



8, 提案（ケーススタディ）

8.1　敷地 A「ヨリミチ・プロムナード」

本敷地は白沢街道の北側に位置し、白沢小学校に通う生徒の動線と敷地西側に位置する薬師堂の参道が重なり、東側には明治に創業した酒店「I 商店」が存在する。空地を媒介に個別性の強い空間資源をつなぎ合わせることで、低/未利用だった空地が小学生や周辺を通る住民の新たな動線と居場所になるよう提案する。

登下校の寄り道を促すような児童館や駄菓子屋の機能を設けるとともに、本敷地に「白沢宿の会」の拠点を設けることで、大人と子どもの活動が交差し、地域の拠り所となる。また、敷地の南側にある空き家を改修することで、参道を拡張しつつ空地との活動のつながりを設ける。

以上のことから本敷地では小学生を主体に、近くを通る地域住民や薬師堂、日本酒を目当てに訪れた人を対象に、寄り道をして滞留をする仕掛けづくりをする。

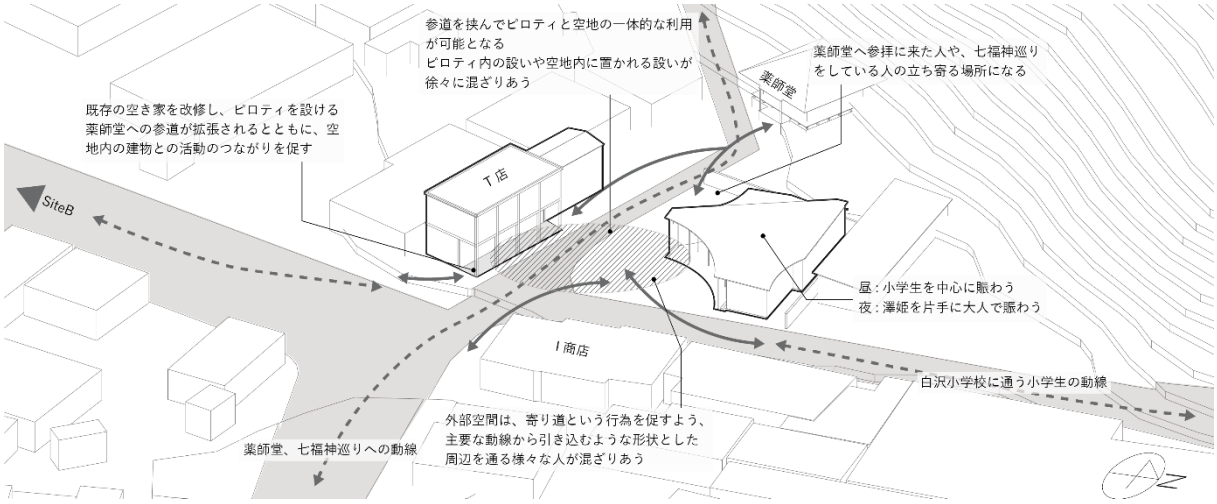


図 4　「ヨリミチ・プロムナード」

8.2　敷地 B「ベース・プロムナード」

本敷地は白沢街道と裏通りの 2 面に接道すると同時に、周辺には本陣や田畑などの空間資源が存在する。このことから、町の中に新たな動線を生み出すとともに、宿泊施設などの機能によって白沢町の歴史や文化に触れる空間を提案する。

現在、本陣では収まりきらない歴史的書物の整理が進んでいるため、本敷地の母屋ではそれらを保管・展示することで宿場町としての営みを知ることのできるギャラリーとして機能する。また、敷地内の離れは農業を生業とする人々の共用倉庫として機能し、かつて宿場町でみられた生業同士の連関が生まれるきっかけを創出する。

以上のことから、宿泊施設やギャラリー、共用倉庫によって地域内外の人々が白沢町の空間資源を通し、新たな関係性を育むことのできる空間とした。

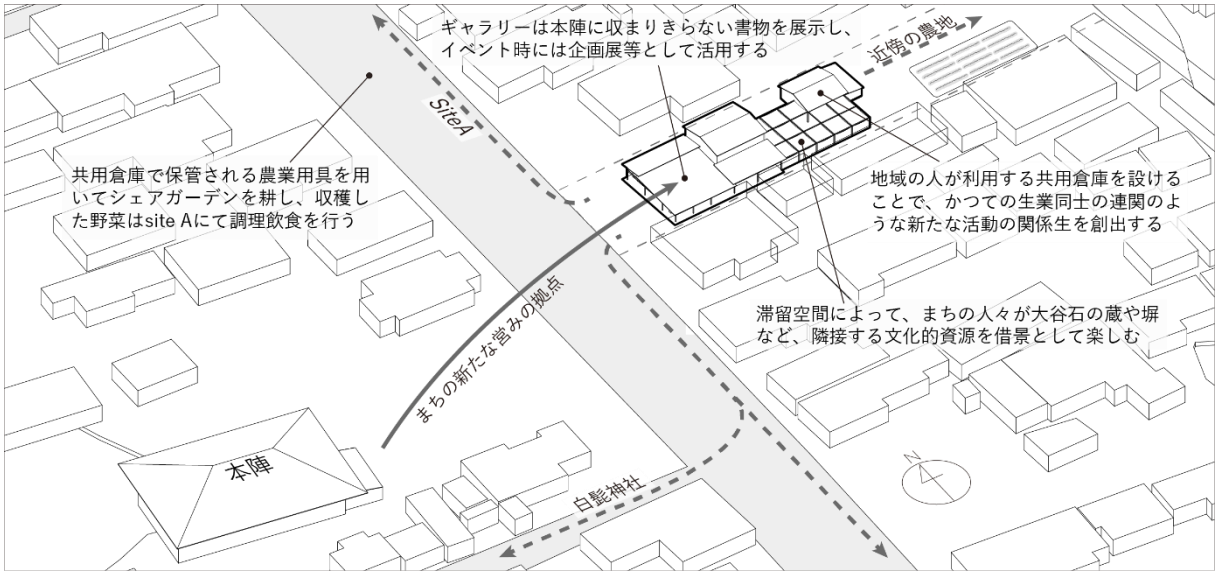


図 5　「ベース・プロムナード」

8.3　敷地 C「マージナル・プロムナード」

敷地 C は白髭神社北側に隣接し、新興住宅地と白沢街道界隈のバッファーに位置することからそれらが関わりあうポテンシャルを持った敷地である。

敷地周縁を桜並木や連続する覆いが作る小径プロムナードが囲い込むことで、多様な居場所のある広場となる。既存の神社参道や児童公園、桜並木を生かしながら、斜面林が大きく隔てる白沢町内を関連づけることで、町内の様々な関わり合いを生む。広場は白髭神社を中心とした祭りの広場としても活用し、神社に隣接する大谷石蔵はイベント時の設えなどの収納や休憩小屋として活用する。多様な活動を受け止める敷地 C は、バッファーとしての空地を見立てることで白沢町に新しく移り住む人々と白沢街道に住まう人々との共創を生む余地となる。

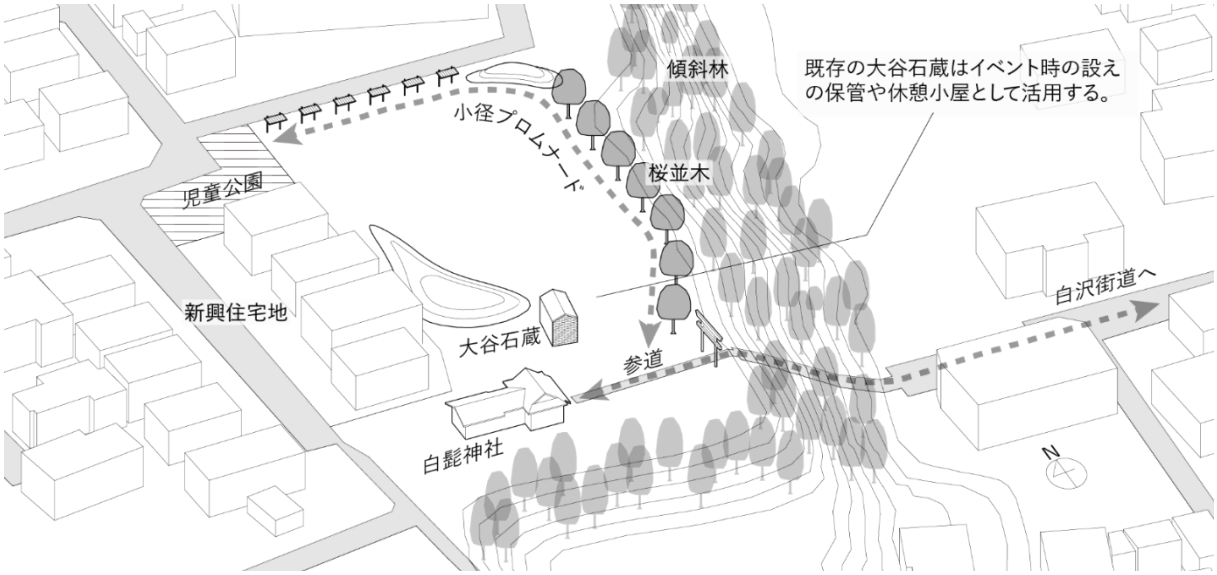


図 6　「マージナル・プロムナード」

8.4　敷地 D「エンター・プロムナード」

街道と新興住宅地をつなぐ斜面に位置する複数の空地に対して、周辺に隣接する薬研坂やパン屋、水源といった白沢独自の資源をつなぐ待合所をつくる。そこでは地域住民が倉庫や設え、植栽などを共同で管理することで街道を訪れた人が地域住民の手によって出迎えられるような場を提案する。

斜面の形状に沿うように緩い勾配のプロムナードを作り街道と斜面上の新興住宅地をつなぐ動線を拡張しつつ、バス利用者の待合所や休憩スペースを設けることで白沢を訪れる人を迎え入れるような場になる。平日は散歩の道中となり、休日は道を挟んだ向かいのパン屋で買ったパンを食べながらバスが来るのを待つことができる。

共同の管理をするという行為や敷地向かいのパン屋さんとの関わりがコミュニティ同士の新たな関係性を生み出し、白沢宿の玄関口に位置し隣接する資源と関係を持ちながら人々を迎え入れるプロムナードを創出する

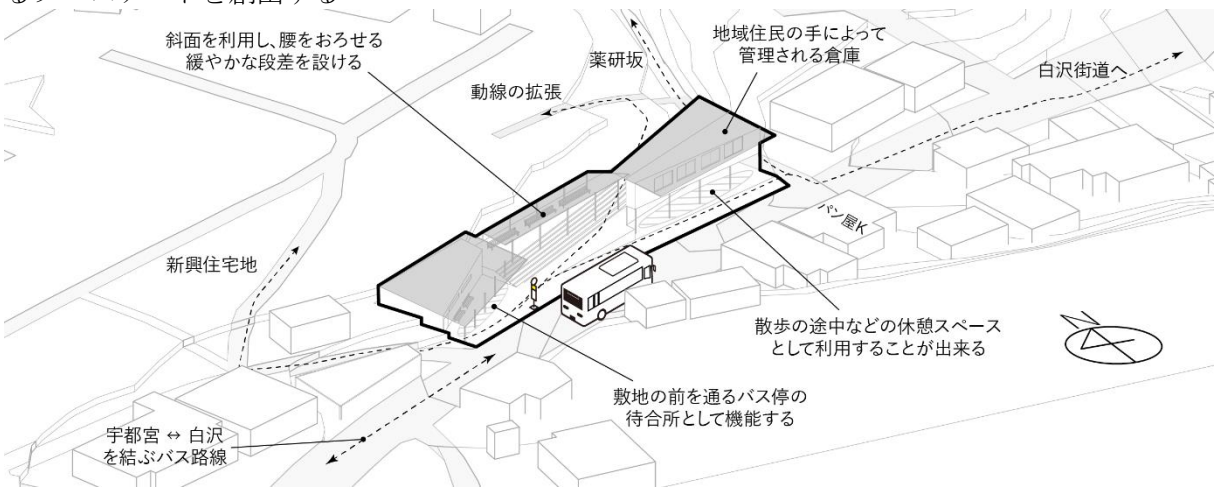


図 7　「エンター・プロムナード」

9. まとめ・提言

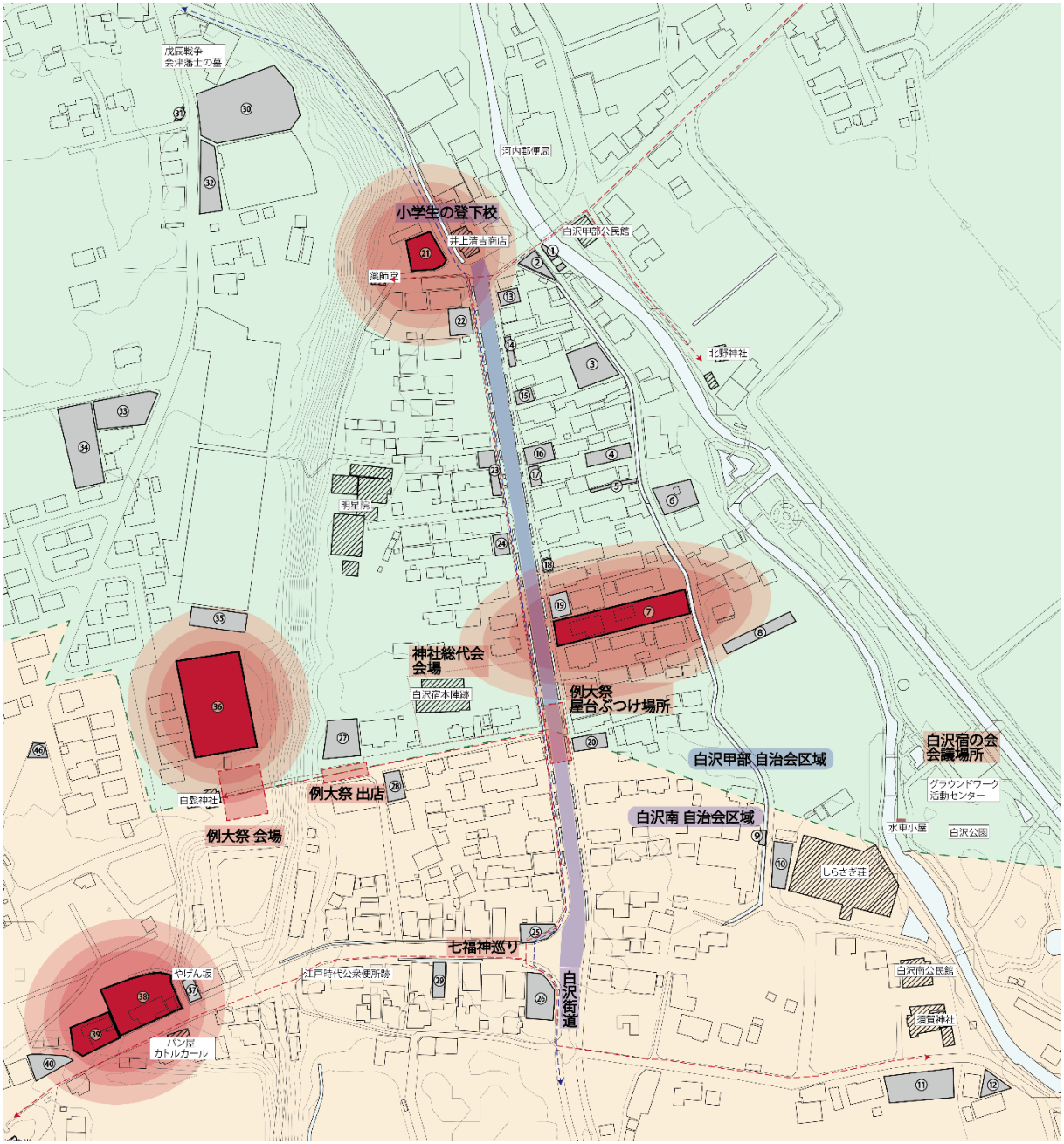


図 8　分析を踏まえたマッピング

以上、宇都宮市白沢町における分析から町内に点在する空地の中で、白沢独自の空間資源に深く関係する特徴的な空地を 4 つ抽出し、ケーススタディを行った。それぞれの敷地にて周辺に存在する個別性の強い空間資源同士を繋ぎ合わせるとともに、人々の滞留活動を生み出すプロムナードを作る。それらは、今まで町の中で関係が希薄だったコミュニティ同士が、多様な活動を行う素地となり、同時に相互に関係づくことで、新しい共創の輪が育まれる。白沢町における人々の関与により新たな価値を創造する可能性を示すものである。

【参考文献】

「21 世紀への贈りもの　河内ふるさと探訪」　河内町, 2000 年
「文化財探訪　～奥州街道を訪ねて～」　南那須町今日委員会, 2002 年
「宇都宮市景観形成重点地区（白沢地区）」
https://www.city.utsunomiya.lg.jp/shisei/machizukuri/keikan/1009372.html